第一部　リップシュタット

（一）前夜

フリードリヒ四世の葬儀が皇孫エルウィン・ヨーゼフ二世の名で執り行われたのは、死去から僅か二ヶ月後の帝国暦四八七年末も押し詰まった一日だった。この日の朝、一〇数名の儀杖兵の肩に担われたフリードリヒ四世の棺は、三〇年余を閲した新無憂宮を出て、六頭立ての馬車に載せられた。帝国宰相リヒテンラーデ公を伴った……有り体には連れられた……エルウィン・ヨーゼフ二世を乗せた馬車がこれに付き添い、千人を超える廷臣の乗る地上車が従う。

門閥貴族たちにとって屈辱だったのは、棺と玉座とともにあったのが彼らではなく、ラインハルト・フォン・ローエングラム侯爵であったことだった。特にブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム侯、およびその一族にとって、恥辱の杯に注がれた侮辱の酒はいっそう苦かった。宮廷最大の実力者であり、次代もまた帝国の柱石たるべき彼らが、新皇帝に従う行列の半ばよりもさらに後方にしか、その位置を与えられなかったからである。

「おのれ、孺子めが、何様と思っておるのか！」

ブラウンシュヴァイク公などは頭から蒸気を吹き上げんばかりに激昂し、他の貴族たちの中にも、帝国騎士の出身に過ぎないラインハルトが、事実上、帝国の最高権力者の一人として振る舞い始めたことに怒りを隠さぬ者は数知れなかった。

「その場所が嫌なら、いっそ列席を辞退してはいかがか？ 何も葬儀に居並ぶことだけが先帝陛下を悼む術（すべ）というわけでもあるまいゆえに」

抗議を申し入れた彼らに、リヒテンラーデ公の応答は冷ややかさを極めた。

「狐が……孺子（こぞう）の威を借りて、我らが頭上に臨まんとするか⁉」

ブラウンシュヴァイク公らの怒りは偏見に満ちたものだったが、事実を正確に示すものだった。帝国最大の貴族たちを前に、リヒテンラーデ公の強気を支えているものがあるとすれば、ラインハルトに従う膨大な帝国軍の将兵以外にあり得ない。

ラインハルトももはや名もなき一介の帝国騎士ではない。すでにローエングラム侯爵として、帝国の中枢に重鎮たるの地位を占めるばかりでなく、帝国屈指の大貴族としても確固たる立場を築き上げていた。前（さき）のアムリッツァ会戦の前後で事実上確保した、広大な帝国辺境領に加えて、旧クロプシュトック侯領を含め、廃絶された旧家の領域の統治を併せ許されていた――正確には、皇帝に許可させていたのである。同時に、この領域に隣接して広がり続けている帝国辺境領。その領域の治安を委ねる、という名目で中央を逐われた多くの高級士官たち……彼らの多くは平民か、門閥帰属に引きを持たない中下級貴族の出身だった……の支持がラインハルトに集まるのは避けがたいことだった。

すでに帝国軍艦隊の半数を麾下におさめたラインハルトは、さらに最高司令長官として全艦隊の指揮権を手中にしている。ラインハルトが、現職の司令官達をすべて更迭し、彼の元帥府に属する若手の指揮官達を後釜に据えようとしている。その噂は、すでに噂の領域を超え、現職司令官達の動揺を誘っていた。彼らが現在の地位を守ろうとすれば、ローエングラム元帥府に所属する必

要があるのは自明だった。しかし、彼らの内の何人かはローエングラム元帥府に門前払いを受け、他の何名かは今更『生意気な金髪の孺子』に頭を下げられるほどに自らのプライドを貶めることができず、そしてまたある者は、かつて麾下に迎えた金髪の若者への処遇に関して痛切な悔恨の中にいた。

「いかにアムリッツアの英雄とは言え、やつの地位はいまだ艦隊最高司令長官と言うに過ぎぬ。なにゆえを以て我らの上位者として振る舞うか！」

貴族たちだけでなく、シュタインホフ、エーレンベルク両元帥ら、帝国軍幹部の多くもまたラインハルトの僭上沙汰を前に不平と怒りと戸惑いのただ中にあった。

新帝エルウィン・ヨーゼフ二世がラインハルトに与えた帝国軍艦隊司令長官なる地位は、帝国軍の指揮系統上、統帥本部総長の麾下に属し、またその指揮命令権はいわゆる軍令……戦闘指揮の分野に限定される。軍の編制、人事、教育等に関する軍政権限は軍務尚書の掌中にあり、軍令の指揮系統に属する者が軍政に容嘴（くちだし）することは許されない。

しかし、ラインハルトも、また帝国宰相リヒテンラーデ公も、そのような規定にはまったく無頓着だった。

「帝国には憲法がない」

そう評したのは、同時期に同盟軍の代表的な用兵家と知られるようになるヤン・ウェンリーである。

ラインハルト・フォン・ローエングラムと同時代に、彼と比肩する唯一の存在……僅かに、オスカー・フォン・ロイエンタールのみが、彼らと並び立つ、あるいはその可能性を持った個性として名を挙げられることが多いのだが……として称されたヤン・ウェンリーではあるが、自ら筆を執っての著述は非常に少なく、彼の言行に関する記録の多くは、彼の結婚前の養子だったユリアン・ミンツに依存することが多い。しかし、優れた時代の観測者としての名が、それでいささかも損なわれるものではなかった。

「軍政、軍令の分離からして、帝国に於いては成文法ではなく慣習法の下での規定に過ぎなかった。かつ、皇帝独裁の政治体制である以上、慣習法の拘束力は、その時点での皇帝の気分、或いは意思のみに依存していたとも言える。この時期の帝国に於いて、ローエングラム侯が急速に帝国の支配権を確立していけたのは、帝国でのこういった根本的な政治システムの曖昧さを熟知し、それを恣意的に運用することを躊躇わなかったためだ」

ヤンが指摘するとおり、ラインハルトにとって地位も肩書きも、その存在価値は、自分の座する席をもっともらしく荘厳するための装飾程度のものという認識でしかなかった。

「要するに結果を出せばよい。嫌だというのならば抵抗するがいいのだ」

やりすぎでは……と危惧するキルヒアイスに、ラインハルトは辛辣に笑い捨てた。

「俺はな、キルヒアイス。もう十分に我慢したんだ。一〇年我慢した。もう十分だ。皇帝にはさっさと死なれてしまったが、門閥貴族の連中はまだ生きているからな」

ラインハルトが単に『皇帝』と言う時、それは新帝を意味しない。彼とキルヒアイスからアンネローゼを奪い取り、一〇年余りにもわたって後宮に幽閉した彼らの仇敵……フリードリヒ四世以外の何者をも指すことはない。

アムリッツアの戦いを経て、フリードリヒ四世急死後の混乱を収めた後、ラインハルトはキルヒアイスを上級大将に任じ、ロー

エングラム元帥府の副将に任じている。与えた肩書きこそ宇宙艦隊副司令長官だが、ラインハルトがキルヒアイスに期待するのは単なる一介の艦隊司令官、あるいは艦隊集団の先任指揮官でさえない。この時点でラインハルトがキルヒアイスに与えた実権は、すでに単なる副司令官、あるいは一介の上級大将に与えられるべきそれを遙かに超えていた。

シュタインホフ統帥本部総長が発令するいかなる命令といえども、ラインハルトとキルヒアイスの副署がなければ実効を持たず、エーレンベルク軍務尚書は彼ら二人、特にキルヒアイスの承諾なしには少尉一人の任官・罷免をすら命ずることもできない制度に改められた。

「なぜだ、なぜ、この私が二〇(はたち)やそこらの若造の副署がなければ、たかが一〇〇帝国マルクの経費すら決裁できないと言うのだ！」

シュタインホフ元帥は、腹心の部下の経費申請を却下され、激昂して叫んだが、『一〇〇帝国マルク以上の経費支出はキルヒアイス上級大将閣下の決裁なしには承認されません。その旨、先月、皇帝陛下が詔勅により御裁定になりました』という事務官の指摘に、反論の言葉を探し当てることすらできなかった。リヒテンラーデの銀狐と金髪の孺子のでっち上げた傀儡の皇帝が、何を詔勅だ、片腹痛い……喚き出したい怒りを抑える以外に、今の彼らにはすべがなかった。

「孺子が、いい気になるな、今に思い知らせてやる――――！」

腹心や側近たちの遊興費を私費でまかなってやる程度のことは、仮にも帝国元帥たるシュタインホフやエーレンベルクにとって大したことではない。彼らレベルの地位に達すれば、問題はもはや金銭ではあり得ない。

問題は誇りであり、矜持だった。

これまで帝国の柱石と仰がれ、ゆえにこそ意に任せての国費の浪費……無論、彼らに浪費という意識はなかったが……を許されてきた彼らのプライドを、ラインハルトは敢えて真っ正面から踏みにじって見せたのだ。

加えて、歴代の門閥貴族、帝国政府の上級官僚、帝国軍の古参提督たちは軒並み、年明け早々の慣例である叙勲からはずされたのだ。

屈辱に青ざめる彼らに追い打ちをかけ、ラインハルトはエルウィン・ヨーゼフ二世帝の名において布告を追加した。

「これまでの受勲者、受爵者といえども、それに相応しからざる行跡、あるいは戦場での不覚によってはこれを剥奪する」

事実、年明けの叙勲は、新たな受勲や授爵の代わりに、勲章や爵位の剥奪までが実際に行われた。無論、ラインハルトのみならず、それに相応しからぬと衆目の一致する数名が犠牲の祭壇に供せられたに過ぎなかったが、ラインハルトが門閥貴族たちの既得権を一顧だにしていないこと、帝国宰相たるリヒテンラーデ公もまたそれに同調していることを明瞭に示す事件として、反ラインハルト派を切歯させるに十分だった。

フレーゲル男爵も、危うく祭壇への階梯を強いられる寸前まで追い込まれた。

「敢えて法の外へとは言わぬ。しかし、かくまで不見識なる人物に男爵、帝国軍中将を名乗らせておくのはいかがなものか？」

ラインハルトの指摘が典礼省を経てブラウンシュヴァイク公へ伝達され、ブラウンシュヴァイク公は激怒しつつも、彼自身、アンネローゼへの誣告に名を連ねた証跡をラインハルトに握られている身である。

「我が生涯における先帝への忠誠に鑑み、我が甥への御酌量を頂きたく……」

帝室すら所有し得ない名画の多く、帝都星における荘園、別荘、

別邸の所有権を手みやげに、幼帝の前に拝跪する以外に、さしものブラウンシュヴァイク公も甥を不名誉の泥沼から救い出すすべを見いだせなかった。
「エルウィン・ヨーゼフ二世陛下のお健やかなご成長を祈念いたし、我がブラウンシュヴァイク公家の帝室への忠誠の証として……」
　伊達に宮廷に長いわけでもないか――ラインハルトが評したのは、ブラウンシュヴァイク公がそれらを帝室への寄贈として差し出したことだった。ラインハルトやリヒテンラーデ公への贈与であれば、『罪を金で贖うつもりか』との名目で断罪できるというものだったが、さすがに宮廷遊泳の術に長けたブラウンシュヴァイク公というべきだっただろう。
「が……それだけのことだ」
　ラインハルトにしてみれば、いずれブラウンシュヴァイク公を宮廷から追放することは規定の方針である。ここでいくら抗(あらが)って見せたところで無意味なこと。所詮、ブラウンシュヴァイク公はグラスの中の嵐を避けようとしているに過ぎず、ラインハルトがグラスどころかグラスを載せたテーブルごとひっくり返そうとしていることに、この期に及んでまだ気づいていないのが笑止極まりなかった。
「おのれ、生意気な金髪の孺子が、自分を何様と思い上がりおってか！」
　一方、当然極まることに当のフレーゲル男爵は怒り狂った。
「直ちに新無憂宮へ赴く。赴いて、あの孺子へ決闘を申し入れる！」
　叫ぶ男爵を、アンスバッハとシュトライト准将とが辛うじて押しとどめたと聞き、ラインハルトは軽く舌打ちした。
「惜しいな。来れば、応じてやってもよかったものを」
　ラインハルトの辛辣さは、それを新たな噂として宮廷に流したことだった。曰く、フレーゲル男爵はローエングラム侯と決闘すれば負けることが分かっていた。だから止めてもらうことを期待して、伯父の側近たちの前で怒って見せ、新無憂宮へ向かおうとして見せたのだ、と。止められて、内心一番ほっとしているのがフレーゲル男爵当人だろう――と。
　宮廷には不文律がある。
『水に落ちた犬は叩け』であり、『バスに乗り遅れるな』である。
　バスとは、新たに生まれたエルウィン・ヨーゼフ二世帝治下のローエングラム-リヒテンラーデ枢軸体制であり、水に落ちた犬とはブラウンシュヴァイク公やリッテンハイム侯ら、先帝フリードリヒ四世のもとで栄華を極めていた大貴族たちのことだった。
　噂は噂を呼び、たちまち巨大な尾ひれを引きずって新無憂宮を縦横に泳ぎ回り始めた。結果として、何日も経たぬ内にフレーゲル男爵に冠せられたあだ名の数は、記録に残されただけで数十に達した。『机上の勇者、戦場の怯者』、『怯者フレーゲル』などはまだ良い方で、酷くなると『口先男爵』、『口だけ男爵』、果ては『最低男爵』あるいは尊称すら省略して『最低男』とまで囁かれるほどだった。
　おかげでフレーゲル男爵は宮中に伺候するわけにもいかず、伺候しなければしないでますます噂が悪意の衣を厚重ねにして膨れあがっていく悪循環を前にどうすることもできなかった。
　悪意に満ちた中傷を案出したのは、むろんオーベルシュタインである。
　オーベルシュタインもまた、位階を大将に進めるとともに、ローエングラム元帥府総参謀長と帝国軍参謀本部長の地位を兼ねていた。ラインハルトが事実上の政権掌握を果たして以来、旧門閥貴族の神経を逆撫でするだけでなく、急速かつ確実にその社

会的・経済的地位を破壊する施策が、次々に世に送り出されていたが、それらの大半が、この義眼の謀略家の手になるものであるとは、衆目の一致するところだった。

「キルヒアイス上級大将に権限を集中されるのは危険です」
　そのオーベルシュタインが進言したのは、帝国暦四八八年が明けて間もなくのことだった。
「キルヒアイスが増長して私に逆らうようになるとでもいうのか、卿は」
「幼なじみと言うのも結構、有能な副将と言うのも宜しいでしょう。しかし、その両者が同一人物というのは危険です」
「オーベルシュタイン、卿は何か勘違いをしているのではないか」
「勘違いと仰いますか」
「キルヒアイスが幼なじみだから登用したのではない。キルヒアイスが私と共にここまで歩んでこられるだけの人間でなかったなら、そもそもキルヒアイスは私の幼なじみにはならなかった」
「閣下」
「聞け、オーベルシュタイン。かつ、キルヒアイスが有能なだけで、私にとって真の半身たり得る存在でなかったなら、やはり彼が私にとっての幼なじみではなかっただろう。それであれば、私も卿の言うとおりにキルヒアイスを遇しただろう」
「であるとしてもキルヒアイス提督一人に権限が集まれば、組織としての危険度は増します。また、閣下がキルヒアイス提督一人を重用されるとなれば、他の者たちの不満を誘うことにもなり、組織の構造に亀裂を入れる恐れがあります」
「卿は私の言うことを聞くつもりがないのか？」
　ラインハルトは恐ろしく不愉快げな表情で語気を強めた。
「この件で、卿に意見を訊くつもりはない。出過ぎるな、オーベルシュタイン」
　ラインハルトにしてみれば、アンネローゼのことで『姉をとるか、ゴールデンバウム王朝打倒の志をとるか』と問われて以来、二度目の、不快極まる問いかけだったのだ。
　オーベルシュタインの有能さを認めるにやぶさかではない。リヒテンラーデ公に目をつけ、巧みな折衝でローエングラム‐リヒテンラーデ枢軸を作り上げたのはオーベルシュタインの功績と言って良い。アンネローゼに着せられかけた冤罪に対して、リヒテンラーデ公だけでなくリーフェンシュタール子爵やシュミットバウアー子爵夫人にまで協力を取り付け、フレーゲル男爵を初めとする誣告者たちから致命的な言質と、その証拠を確保したのもオーベルシュタインならではのことだった。さらに、これから門閥貴族を窮地に追い込んでいく上で、義眼の参謀長の謀才が欠くべからざるものであることを、ラインハルトは十分以上に知悉していた。
　だが――
「――いつ、俺がキルヒアイスを非難して良いと言ったか。キルヒアイスを排除して、一体なにがめでたくなると言うのだ。まったく、この件に関してだけは、あいつの言っていることは訳が分からない」
　さすがにオーベルシュタインへの不満を、キルヒアイスにも姉アンネローゼにも漏らすわけにはいかず、元帥府の廊下を行きながら一人呟くことの多いラインハルトだった。

　フリードリヒ四世が逝去し、葬儀の席次を巡って、大貴族たちが暗闘を繰り広げている間にも、ラインハルトはすでに次の一手に着手していた。

「葬儀の席次などで宮廷での序列が決まるなどと思っているなら、させておけばよい」
ラインハルトにとって席次争いなど笑止の極みでしかない。彼が真に帝国での最高権力を手にした時、宮廷での序列はもはや権力への距離を意味しなくなる。フリードリヒ四世の逝去は、ラインハルトと至高の座との距離を縮めこそすれ、決して遠ざけはしなかったのだから、その時期はもはや、目睫の間と言って良い。
「彼らにとっては、ローエングラム侯も新たに加わった門閥貴族の一人、というに過ぎないのでしょうね」
キルヒアイスの批評もまた辛辣だった。
「新参者の、な」
ラインハルトは唇を歪めたが、そのような動作すら優雅極まる微笑に見えかねない。本人の意識はどうあれ、この方の卓越した美貌が、その野心を覆い隠す大きな武器となったことは確かだ……キルヒアイスはそう思うのだ。
「――で、どうなのだ？」
ラインハルトが転じた視線を、無表情な双眸が青白い靄を帯びて出迎える。生身の人間には決して持ち得ない異様な眼光は、その所有者が義眼であることを告げていた。
「全額が同盟のディナール貨に換金可能な預金としてフェザーンの口座に振り込まれたことを確認致しました。口座のリストをご覧になりますか？」
「高い手数料を取っただけのことはある、ということか」
「左様ですな。無論、拐帯した際の報復を恐れたのも事実でありましょうが」
ラインハルトがオーベルシュタインに与えた命（めい）は、同盟領潜入と、その後の対同盟軍工作の実行に必要な資金を、アーサー・リンチがフェザーンと同盟とで引き出し可能な形で送金することだった。
「どうせ最後には制圧されるのです。それほどの大金を与える必要があるのでしょうか」
キルヒアイスは疑問を呈したものの、ラインハルトの言葉に納得して引き下がった。曰く、『蔑むべき卑劣漢とは言え、俺たちの目的のための道具として使う以上、道具としての正当な扱いはするべきだ。失敗を前提として策を授ければ、リンチはそれを察するだろうからな。そうすれば、やつが、我々の意図とまるで違う行動に出る可能性まで考えに入れなくてはならなくなる』
とは言え――
過去、政争に敗れた帝国貴族が亡命に際して家産の一部を持ち出した例は多く、それが不可能とは思われなかったが、ラインハルトたちが算定した所要の費用は実に二億帝国マルク近くに上った。これほどの大金を持ち出した例のなしとはしないものも、同盟政府にも気取られずに、しかも同盟での通貨として使用可能となるように送金するというのは不可能に近いのではないか……よくてその一〇分の一。わるくすれば二〇分の一も送り込めれば上出来とすべきでは――
そう思われていたのだが、オーベルシュタインが接触したフェザーンの銀行家は、『送金額の二〇パーセントを手数料として頂けるなら、八〇パーセントを完全にディナール貨で使えるように、同盟へ送金させていただきますが』との提案を持ち込んできた。
「――いいだろう」
数分の熟慮を先行させ、ラインハルトは許可を与えたのだ。
「万一にも詐取されたり、あるいは同盟政府に察知された時にの責任は、そやつにも負ってもらう。帝国軍が健在である限り、あらゆる手段をもって追及し、最も残酷な死をもって贖ってもらう。その旨を伝えるがいい」

ラインハルトの、そしてキルヒアイスの眉を同時に顰めさせたのが、オーベルシュタインにその『銀行家』を紹介したのが、ほかならぬヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールだという事実だった。
「なぜ、彼がリンチのことを知っているのだ？」
「いえ、そうではないのです」
オーベルシュタインは言う。フェザーンの銀行を経由して同盟へ、あるいは同盟から現金を送受するのは、帝国の中級以上の貴族にとって日常茶飯事でしかないのだ、と。
さすがに驚きを隠せなかったラインハルトだったが、オーベルシュタインは眉一つ動かさなかった。
「大部分の貴族にとって、投資した金が金を生むのであれば、それが帝国に於いてであろうが、同盟でであろうがどうでもよいことでした。問題は収支決算の結論であって、過程報告ではないのですから」
「相手が同盟と知りつつ、貴族たちは投資を続けていたということですか？」
「それは違います――――が、ここはローエングラム元帥府であって、ビジネススクールではないはず。それとも、貴官は帝国の支配権ではなく、ＭＢＡ（経営修士）取得に目標を取り替えるとでも言われるのか？」
最後はキルヒアイスに向けた言葉だった。
ビジネスとはそう言うものではないか。問題は利益であって、客の徳性や道義ではない。極貧の聖者が門前払いされるべきであるならば、商品への対価を豊富に持ち合わせている最悪の犯罪者こそがＶＩＰルームへ招待されてしかるべきである。
語りつつ、オーベルシュタインはあからさまに時間の浪費を嫌忌する表情になっていた。
「いずれにしてもオーベルシュタイン家では、これほどの額を送金できる仲介者へのコンタクトを持ち得なかったのです。リーフェンシュタール子爵なら、ブラウンシュヴァイク公家からのコネクションも利用できる上に、当面は我らに対して積極的な悪意をもたれる心配は少ない。ブラウンシュヴァイク公が、この送金に疑問を呈する危惧もなければ、もとより送金自体に気づく恐れすらないでしょうから」
「しかし、リーフェンシュタール子爵は気づかれるでしょうね」
「同盟の混乱は帝国を利しこそすれ、不利益にはつながらぬ。その道理を解さぬ子爵とは考えられない。異論あれば、伺いたいが？」
「――――この件はもういい。卿に任せたのは私だ」
短く言い、ラインハルトが不毛……に近い会話に終止符を打った。
「卿はなすべきことをなした。それでいい……ただ――――」
「――――？」
「貴族たちと同盟のつながりについてはもう少し詳細を知った方が良いようだ。この件に関する調査チームを作れ。人選は卿に任せる」
「些か時を要すると考えますが？」
「構わない」
数日どころか、数ヶ月単位の作業だとさえ考えていない――――それがラインハルトの応えだった。
「少なくとも一年、長ければ数年単位での作業だと思うが、卿はどうか？」
「御意の通りと存じます」
軽い驚きの表情……とは言え、オーベルシュタインにしてみればめったに見せない表情と言っても言い……を見せながら、半白

の髪の参謀長は金髪の若者の意見に首肯を示した。
　同時にキルヒアイスもまた、ラインハルトが直感したに違いない真実の構図の一端に思い至った。
「まさか……帝国と同盟が……？」
　ラインハルトの打ち付けた掌が、黒檀のデスクの上で烈しい音を立てた。翻り、燃え上がった黄金の炎の中に、熾烈な蒼氷色（アイス・ブルー）の眼光がキルヒアイスを突き刺した。
「どんなことでもあり得るということだ、キルヒアイス。金を動かすのに相手を選ばぬと言うのであれば、自分の懐を豊かにしてくれるのであれば、相手が同盟であっても構わないと言うことがあっても別に不思議でも何でもあるまい ――― が、さっきも言ったが、この場はこの件をこれ以上、議論する場ではあるまい。ゆえに、この件はオーベルシュタイン、卿に預ける。いいな？」
　深々と一揖し、オーベルシュタインは回答に替えた。
「いかにも承りました、元帥閣下」

「あれが成功すれば、ヤンは国内のことに追われてこちらには手を出せまい」
「御意。国内の平和を乱されて、叛乱軍もお手上げでしょう」
「平和というのはな、キルヒアイス、無能が最大の悪徳とされないような幸福な時代を指して言うのだ。貴族どもを見ろ」
　教師に悪戯を仕掛けた悪童にしては鋭すぎ、覇気の強すぎる表情でラインハルトは言い捨てる。
「貴族を恐れる必要はありません。その点では、まったくラインハルト様の仰るとおりと、私も思います」
　門閥貴族たちを敵に回して帝国を二分することになるだろう戦い。その戦いの謀略面を委ねられ、彼らを暴発への道へ誘い込む役割を担うのがオーベルシュタインであるとすれば、キルヒアイスは、暴発した彼らを掃滅し、滅亡の淵へ追い落とす実戦面での最高の責任と権限を与えられている。
　フリードリヒ四世逝去後の混乱が治まった帝国暦四八七年一一月末以来、キルヒアイスの許に集められた軍事的な才華は、まさに帝国軍の精粋と言っても言い過ぎではなかった。作戦面では、双璧と謳われるオスカー・フォン・ロイエンタール、ウォルフガング・ミッターマイヤーにエルネスト・メックリンガーが加わり、戦術レベルでは猛将ビッテンフェルトにケンプ、ミュラー、ルッツ、ワーレン、ケスラーらが艦隊司令官にその名を連ね、作戦の実施における完璧さを保証していた。
「帝国を完全に制圧するには、三つの要素を押さえなければならない」
　約二ヶ月間の集中的な作戦検討の結果、キルヒアイスが導き出した結論……あるいは、来るべき内戦における主題とも言うべきものがそれだった。
　帝国暦四八八年一月のある日、キルヒアイスが召集した会議は、この主題に対して最終的な回答を与えるものだった。
「一つは皇帝 ――― これは既にローエングラム‐リヒテンラーデ枢軸の成立によって我が手の内にある」
「しかし、我らが帝都を離れれば、皇帝を掌中に握りしめることになるのはリヒテンラーデ公爵ということになる」
　金銀妖瞳（ヘテロクロミア）の提督による指摘は、ローエングラム‐リヒテンラーデ枢軸成立を可能にした要素への的確な洞察に基づくものであり、キルヒアイスも完全な同意を抱くものだった。
「表向き、我が軍は僅かな地上兵力を残しただけで帝都をほぼ空にすることになっていますが ―――」
「実は違う、ということだな？」
「ええ」

帝都にはアンネローゼも残るのだ。リヒテンラーデ公がラインハルトの背に刃をかざすとして、その腕には彼女を盾として捕らえている可能性が非常に高い。
フリードリヒ四世の死に際し、アンネローゼはその責任を問われ、冤罪に問われる危機に陥っている。キルヒアイスの到着が間に合い、また、フリードリヒ四世の遺書という偶然の産物によってアンネローゼの生命は救われた。キルヒアイスにしてみれば、アンネローゼを保護できる十分な手立ても打たずに帝都を空ける危険を冒すのは、一度で十分だったのだ。
「これは極秘事項であって、ローエングラム侯の他は、我々だけが知っていることになります」
一瞬、作戦会議室内が低いどよめきに満たされ、間もなく納得の静寂に取って代わられる。
最初に口を開いたのはミッターマイヤーだった。
「なるほど、これなら前線に出す兵力も削らずに済むし、万一の場合にも対応は早いな。しかも、リヒテンラーデ公の背反以外の不測の事態にも対応できる」
「――まあ、そうだな」
「何か、納得いかないことでもあるのか、ロイエンタール？」
「別にそう言うわけではない。確かに、これは良い手だと思うし、最後の局面でリヒテンラーデ公を逆に罠に落とし込むトリックとしても使えるからな……ただ――」
「ただ、何だ？」
ミッターマイヤーの声がやや苛立たしげな響きを帯びるのは、ロイエンタールの口調が親友同士にだけ通じ合う、ある危険さを含んでいるのに気づいたからだったのだが、無論、それがキルヒアイスや、他の列席者に理解し得るものではない。それゆえに、ミッターマイヤーは早々にロイエンタールの口を封じたかったとも言えるだろう。
「卿らしくない。不安を抱いたまま作戦に同意するなど、失敗の種を撒いて水までやっているようなものだぞ。不審があるなら、さっさと言ったらどうだ」
「いや、不安とか不審とか言うものではない。妙な言い方に聞こえたなら悪かった。謝る――それで、キルヒアイス、これはローエングラム侯の裁可を頂いてあるのか？」
「ええ。もともとはローエングラム侯がそう計画された部分ですから」
青い左目が煌めく白刃の光、右の漆黒の目が鍛え抜いた鋼の輝きを帯びて、赤毛の若者を見つめた。
「――そうか」
一瞬の間が、頷きに先行したのに気づいたのはミッターマイヤーだけだっただろうか。
「ならば、よい。俺に異議はない」
「――第二の要素は……」
ミッターマイヤーが、やや小柄だが完璧な均整に恵まれた体躯を僅かに緊張させたのは、やはりキルヒアイスの言葉に先行した微かな間隙に気づいたからだったのかも知れない。
「第二の要素はブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯を中心とする門閥貴族の勢力です」
が、キルヒアイスの声はそれ以上の逡巡も惑いも見せずに室内を満たして行く。
「皇帝の身柄を押さえ、勅令を味方につけても、ローエングラム-リヒテンラーデ枢軸に帝国の主権が完全には移りません。門閥貴族の力を完全に砕いてしまう必要があるのです」
それが、キルヒアイスを中心としたローエングラム元帥府作戦部が辿り着いた結論だった。

帝国は、帝都を中心としていびつな球体をなす皇帝直轄領と、この球の表面に沿って広がる貴族領から構成されている。大帝ルドルフは、貴族に封じた功臣たちに所領を与え、皇帝領の文字通りの藩屏とした。

いかにルドルフ大帝のもとに帝国軍が武威を揮ったとしても、治めるべき帝国領は余りに広すぎた。帝国軍を細かく、満遍なく帝国全域に配備する愚を洞察していた点で、ルドルフは統治者として一定の評価を与えられて良い。ルドルフ嫌いのラインハルトですら、認めるにやぶさかではなかったのだ。

代わりに、ルドルフがとったのが一種の封建システムであり、貴族領を与えた功臣たちに地方での軍事騒乱を抑えるに十分なだけの私兵を持つ義務を課した。つまり、共和主義者、あるいは平民叛乱の勃発や宇宙海賊の猖獗を見た場合、その宙域の貴族は、その私兵により、これらの騒乱の拡大を防ぐ義務を持つことになる。他の宙域への飛び火さえ抑えることができれば、帝国軍の主力が皇帝直轄領から急行し、敵を粉砕することができる。全帝国領に、叛乱を粉砕できるだけの手厚さで兵力をばらまくよりもはるかに広い戦略的選択肢を帝国政府に与え、かつ軍事費もまた安上がりで済ませることができる。帝国軍の制式艦隊がすべて帝都を根拠地としているのは、この軍制の名残である。

このシステムが逆転し、私兵を持つことが義務から権利に転じたのは、概ね自由惑星同盟が、それまでとは比較にならない強敵として出現した時期に合致する。

「――というより、叛乱軍の連中が貴族どもの勢力を一層強める結果となったわけですから、歴史というものの皮肉さを感じますな」

メックリンガーの評が、この間の経緯を最も的確に示していただろう。

叛乱軍こと自由惑星同盟の武力は、それが帝国と同レベルの国家規模で支えられているだけに、最大の門閥貴族の私兵ですら対抗できるものではなかった。必然的に同盟軍との戦いは帝国正規軍の任務となったのだが、それは国内の叛乱を最終的に撃退するための機動兵力としての機能を失うことにつながった。つまり、各宙域において貴族は自身の私兵のみで地方叛乱を鎮圧せねばならなくなったのだ。

やむなく、帝国政府は私兵の強化と、それに伴う財政的権限を各貴族に許可せねばならなくなった。これをきっかけとして、門閥貴族と呼ばれる大貴族の財政基盤と兵力が急速に強化され、ついには皇帝に比肩するレベルにまで達するに至った。貴族の武力は国家、つまり皇帝の権力からの介入を拒否する手段として使われるようになり、大貴族はますます皇帝権力からの独立性を強めていく。

「ゆえに、皇帝に勅命を出させても、それだけで貴族どもの権力は奪いきれない……とそういうわけだ」

ロイエンタールが結論づけ、一同が同意のしるしを示して頷く。その結論に至ったのは何週間も前のことであり、彼らすべてが結論に至る経緯の細部までを胸に納めて久しかったのだ。

「さらに、貴族は数が多い。ブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム侯の兵力が当然、貴族どもの主力になるだろうが、彼らを粉砕しただけでは、帝国を取り囲む貴族領は新政権には服従しない。中心となる大貴族を失えば、かえって地方軍閥として割拠を始めてしまうだろう」

それゆえ、ブラウンシュヴァイク公らを撃破すると同時に、それぞれの領地での割拠を狙う中小レベルの貴族勢力をも一掃しなければならない。その際、全力を挙げての敵主力破砕を最優先し、地方掃討は後回しにするというのも用兵上の論理性を満たす

作戦方針に違いない。
「――が、厄介なのは叛乱軍どもというわけか」
ミッターマイヤーの声が唸るような響きを帯びた。
「アムリッツアで奴らを完全に殲滅できなかったのが祟るな」
「一応、手は打ってあります……が、時間がかかれば、自由惑星同盟が行動の自由を得る可能性が高くなります。まして、彼らには、あのヤン・ウェンリー・提督がいますからね」
「ヤン・ウェンリーか！」
嘆声に似た声は、室内のほぼ全員から同時に放たれたものだった。彼らの内でヤンと直接に干戈を交えたのはキルヒアイスだけだったが――
「やつは俺たちには、おそらくはできないことを少なくとも二つやってのけている」
曰く、イゼルローンを無血で陥れた。アムリッツアではビッテンフェルトを猪の丸焼きにし損ねたものの、自艦隊の七割を生還させた。これは、生還できた同盟軍艦隊の半数近くがヤン艦隊だったことを意味する。ヤン艦隊以外の同盟軍艦隊は、九割が未帰還だった……と言い換えても良いのだ。
ミッターマイヤーの言葉が、彼らの嘆声の意味を説明して余りあった。
「つまり、第三の要素として、叛乱軍が行動の自由を得るまでのタイムリミットというやつが出てくるわけだ。タイムリミットが来る前に、貴族勢力を、その中核と周辺部分を共に併せて根こそぎにしてしまわなければ、内戦が泥沼化する恐れが出てくる」
ホログラムの航宙図が、ほの暗い室内に銀色のベールのように浮かび上がる。
帝国領域は数百億の恒星、それに数倍する惑星を含む。それらが銀色の靄のように航宙図を満たし、数瞬後、数千の有人星系と戦略上の要衝を示す光点、そしてこれらをつなぐ蜘蛛の糸を思わせる航路を残して光を失う。
その一部が紅く色を変え、帝国領域の過半を覆った。
天頂方向から見下ろすならば、帝都（ヴァルハラ）星系から時計回りにフェザーン回廊に達する宙域、これが貴族勢力の一大根拠地となる。
「さらに、これです」
キルヒアイスの操作に従って、光の靄の中にひときわ濃い紅の領域が現れた。
ブラウンシュヴァイク公爵領とリッテンハイム侯爵領は、隣接こそしていないものの極めて近い宙域に位置している。帝都から伸びる無数の航路は、両門閥貴族領の手前で扇を閉じるように収束し、数本の太い束となってそれぞれある星系を通過している。これらの星系を通過すると、航路は扇を広げるように拡散し、帝国の辺境領域からフェザーン回廊を網羅していた。
要塞ガイエスブルグと要塞ガルミッシュ……イゼルローンを除けば、帝国最大の宇宙要塞が配置された星系だった。帝都から、開拓途上の辺境宙域、さらにフェザーン回廊を結ぶ、帝国で最も繁華な航路の大半を、これらの要塞が扼していることになる。
「当面、第一の要素を我が陣営に押さえられた貴族勢力は、第二と第三の要素を味方につけるべく、これらの領域に立て籠もり、我々の攻勢を支えようと試みると推定されます。貴族勢力の主魁たるべきブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯はガイエスブルグとガルミッシュに主力を置き……」
キルヒアイスが言葉を一瞬切ると、帝都からガイエスブルグに至る数カ所の光点が脈打つようにその光を増した。
「これらの要衝に兵力を配して、我が軍を迎え撃つ作戦を採る可能性が最も高いとの結論に至りました」
曰く、アルテナ、フィッシュハーフェン、ニュルンベルク、レ

ンテンベルク、グローセシュテールネ、ヴィレンシュタイン、そしてガイエスブルグとガルミッシュ。
「そうなってくれれば重畳極まりないが……連中も底まで馬鹿ではない、となったと記憶するが？」
「その通りです、ロイエンタール提督」
七つの光点の内、四つが光を失う。
ガイエスブルグの他、光を保っていたのはアルテナとレンテンベルクのみである。
代わって、ガイエスブルグ、ガルミッシュを起点として、帝都に至る貴族勢力領域が光度を増した。
「敵が――――」
キルヒアイスももう言葉を選んでいなかった。
敵が十分な戦略的知識を持つなら、七カ所に配兵してみすみす各個撃破の機会をラインハルトに与える愚にはすぐに気づくはずである。
ラインハルトの兵力は九個制式艦隊約一一万隻、対する貴族連合軍の総兵力は、正規軍の制式艦隊八個から九個に加え、その私兵集団から制式艦隊五個から七個艦隊相当の兵力、約一六万隻。だが、ガイエスブルグとガルミッシュに主力を置くとすれば、ラインハルト軍の進撃路上の軍事基地に配兵し得る兵力はそれぞれ一個制式艦隊程度に過ぎない。
「典型的な哨線（コルドン）だな。これなら楽だったのだが――――」
嘲る口調は再びロイエンタールだった。
「貴族の連中にも頭のある連中はいる、ということか」
「ええ……未確認ですが、メルカッツ提督、ファーレンハイト提督らがブラウンシュヴァイク公爵からのコンタクトを受けている、と報告されています」
「メルカッツか！」
一瞬にして、一同の声からは嘲弄の口調が消え失せた。
「やつに自在に兵を揮わせたら、厄介なことになるな」
「問題は、メルカッツに腕を揮わせるだけの度量がブラウンシュヴァイクやリッテンハイムにあるかどうか、だな……」
唸るようにミッターマイヤーが応じ、一転して笑いを含んで付け加えた。
「夜郎自大の大バカほど、自分は天才だ、大人物だと思いこみたがるものだ。メルカッツにとっての最大の敵は俺たちではないだろうさ。連中が指揮に容嘴すれば、メルカッツがいようといようまいと、哨線（コルドン）以外の選択肢は残るまい」
「つまり、我らにとって最大の秘密兵器はブラウンシュヴァイクとリッテンハイム……ということか」
「――――そういうことです」
メルカッツが指揮を執るにしろ、ファーレンハイトが前線で兵を掌握するにしろ、彼らの戦略上の選択肢は極めて狭くなる。ブラウンシュヴァイク公たち大貴族が用兵の細部、おそらくは一個戦闘集団の運用にまで容嘴してくるに違いないからだ。
さらに決定的なのは、貴族連合軍に与するだろう職業軍人たちの中に有能な戦闘指揮官が非常に少ないという事実がある。
メルカッツを初めとして、ファーレンハイト、シュターデン、フォーゲルらの名前が挙がっているが、今、キルヒアイスと席を共にしている彼らにしてみれば、メルカッツとファーレンハイト以外はほとんど『雑魚』と一括してしまってもさして間違いはないと思われるレベルの指揮官でしかない。
これは、メルカッツ上級大将が総指揮にあたったとしても、前線での用兵を安んじて預けられる部下が皆無に近いことを意味する。ただし、ラインハルトとキルヒアイスが作り上げた人材リストに名を連ねる人物の中で、准将から中将クラスの相当数が、

彼らの慫慂にも関わらず貴族陣営への参加が見込まれている。
「……が、准将、少将ではブラウンシュヴァイクたちにしてみれば存在しないも同然だろうからな」
ロイエンタールの指摘は完全に正しく、ゆえにメルカッツが選択できる最良の戦略は、ラインハルト軍の主力が、ガイエスブルグ‐ガルミッシュのラインに接触したタイミングで、主力をこれにぶつけた決戦を挑むべく、総兵力のほとんどをこのラインの後方に待機させておく、というものだった。
ただ、それではラインハルト軍は無傷で決戦宙域に現れてくるだろうから、一定の兵力を貴族勢力領域に配置し、ラインハルト軍の兵站線、および後方を常に脅かし、積極的にこれを攪乱する作戦が予想された。この手の作戦であれば、速攻を得意とするファーレンハイトにとって、その軍事的才華を縦横に揮う機会を得られるというものである。同時に、ラインハルト軍の進路の前面には二カ所、最大でも三カ所、有力な兵力を配備し、その進撃を遅滞せしめる。こちらの指揮はメルカッツが兵を直率してあたるだろうし、また、装甲擲弾兵総監オフレッサー上級大将も貴族陣営に加わっているとの確報もある。
「オフレッサー……か」
ラインハルト軍の先鋒に擬されている二人、双璧の表情がさすがに渋くなった。艦隊戦ならともかく、要塞攻略戦となれば装甲擲弾兵同士の戦いが必須となる以上、同盟軍が嫌悪を込めて名付けた『挽肉製造器（ミンチメーカー）』が思う様、その名の通りの嗜虐的格闘戦を演じる局面に際会することは避けがたい。
「まあ、角を曲がったところでトマホークを抱えたやっこさんと出くわすのに較べたら、やつが出てくると予想できるだけまし、というものだな」
不味いワインを呑み込む顔つきでミッターマイヤーが呻き、ロイエンタールも完全には平静を装いきれない口調でフォローを入れた。『今から研究はさせておくさ』――と。
予想される貴族陣営の戦略に対して、ラインハルト軍の戦略は既に決定されていた。
「まずはブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯を帝都で捕らえること」
涼しげにキルヒアイスが言い、一同の苦笑を誘った。キルヒアイスの真意が、獲物を狩り立てるようにしてブラウンシュヴァイク公たちをガイエスブルグへ追い込むにあるのは明白だったからだ。
「彼らの叛乱の証拠を掴むと同時に勅令を得ます。直ちに宇宙港を封鎖し、彼らの叛乱に名を連ねた貴族はことごとく捕縛します。同時に、艦隊主力を動かし、帝都を脱出した者たちを追撃、抵抗すれば乗艦ごと撃沈し、叛乱の勃発を未然に防ぎます」
この出撃は、そのまま対貴族連合軍に対する鎮圧の出撃になるはずだった。さすがに、むざむざと帝都やその周辺宙域で捕縛、検束の憂き目をみるほどブラウンシュヴァイク公たちが愚かでのろまであるとは、どれほど楽観的な作戦を立ててみても予想することは不可能だったのだ。
ここでラインハルト軍は兵力を二分する。主力はラインハルト・フォン・ローエングラム元帥みずからが率い、その総兵力は六個艦隊相当七万隻強。帝都からアルテナ、レンテンベルクを経てガイエスブルグを直撃する、言ってみれば敵の『最大予想線路』を直進する。
一方、ジークフリード・キルヒアイス上級大将は三個艦隊強約三万五〇〇〇隻とともに、帝都から時計回りに貴族勢力領域を縦断、大きく回り込みながらガルミッシュからキフォイザー宙域を通過して、ガイエスブルグ要塞の後方宙域への迂回攻撃を実施す

る。ガイエスブルグ要塞の後方宙域、すなわちブラウンシュヴァイク公爵領とリッテンハイム侯爵領である。
　さらにその征途において中小の反ラインハルト貴族領を総なめに各個撃破、彼らの所領を没収して皇帝直轄領……実はローエングラム侯領へ編入し、ラインハルト軍主力の後方攪乱、帝都への逆侵攻の道を塞ぐ。同時に、ガイエスブルグ要塞などに集結するだろう、群小の貴族たちの経済基盤を破壊し、その動揺を誘う。
　最終的に、ラインハルト軍主力はガイエスブルグ要塞の前面で貴族連合軍の主力を拘束し、一方、キルヒアイス軍はブラウンシュヴァイク・リッテンハイム領を攻略、彼らの継戦能力そのものを喪失せしめる。
「メルカッツでさえ、ローエングラム侯と戦うか、キルヒアイスを迎え撃つか、迷うところだな」
「いずれを撃とうとして、他方がその後背に襲いかかる。万全の体制を固めて迎え撃つつもりが、座して飢え死ぬか、出戦して挟撃されるか……これはまた、不毛な二者択一になる。メルカッツに気の毒だ」
「メルカッツがその気なら、中立など止めていまからでもローエングラム侯に頭を下げればよいさ」
「――――ファーレンハイトも馬鹿な目に遭うことだ……あやつのことだ。ローエングラム侯と正面から戦うは武人の本懐とでも思って連中に加担したんだろうが、これでは……な」
「馬鹿を承知で、敢えて馬鹿をする人たちが他にもいるかも知れません」
　最初、キルヒアイスの珍しい冗談かと思った一同だったが、意外にもキルヒアイスの青い目は微笑っていなかった。
「ブラウンシュヴァイク公のような利口な人たちは余り怖くないです。でも、馬鹿に徹しようとする人が出てきたら……怖いかも知れませんね」